

Vol.1 花島 洋美先生

KABASHIMA Hiromi

所属：国際社会科学研究院

職位：教授

専門分野：政治学、国際関係論

プロフィール：1971年、福岡県生まれ。

九州大学大学院法学研究科修了。博士(法学)。

九州大学法学部助手を経て、2003年4月に横浜国立大学に着任。



社会の動き全般に常にアンテナを張っておくことが大切。

Q1. ご自身の研究について教えてください

アジア太平洋地域の政府間協力の枠組みについて政治学的にアプローチしています。EUでは特に経済分野を中心に制度化が進められてきましたが、APECやASEANプラス3のようにアジア太平洋地域で誕生した協力の枠組みの多くは、メンバーの行動を拘束しない緩やかな形にとどまっています。アジア太平洋地域の協力の枠組みが制度化を避ける構造と意義、TPPなど各国政府の行動を拘束する枠組みとの関係、日本と中国など二国間関係とアジア太平洋政府間協力の枠組みの緊張関係などが現在の関心です。

Q2. 研究者を目指したきっかけを教えてください

大学院に進学しようと思ったのは、実は、もう少しモラトリアムを続けたいと思ったからでした。修士課程2年生のときに就職が決まりかけていましたが、たまたま小遣い稼ぎを目的として投稿した懸賞論文で賞をいただき、アイデアを紡いでいくことのおもしろさを実感したことで研究者になりたいと考えるようになりました。当時の指導教官に相談したところ、研究者になるには基礎的な訓練が足りないと言われ、修士課程を4年間やることを条件に門下にとどまることを許されました。

Q3. 研究の面白さや大変さについて教えてください

社会現象や国際構造については、いろいろな見方から説明できるわけですが、多くの人になるほどと思える視角を提示できるかが私の研究分野の勝負どころだと思っています。ある状況を説明する際に、資料を収集しながら理論的にストーリーを組み立てていくのは、ジグソーパズルを完成させていく感覚に近いものがあり、次々とピースを入れて全体の絵(=構造)が浮かび上がらせていく過程は何度やってもわくわくします。しかし、研究は自己満足の道具ではありませんし、常に競争にさらされ評価を受けるプレッシャーと戦わなくてはなりません。

Q4. 研究者を目指す後輩へのメッセージをお願いします。

どのような研究も一般社会とのインタラクティブが前提ですので、文系の人であれ理系の人であれ社会の動き全般に常にアンテナを張っておくことが大切であると考えます。また、研究者に限ったことではありませんが、国内外の人々とのコミュニケーション能力は研究の展開や職場環境などでよりよい方向に導いてくれると思います。

休日の過ごし方

週末も研究会や学外の仕事で潰れることが多々ありますが、平日が忙しいので週末にまとめて買い物や家事を済ませます。時間があれば車で郊外に出かけたり、ジョギングやキックボクシング・エクササイズなどスポーツをしたりします。

研究者以外に就きたかった職業

管理栄養士です。中学生の頃から栄養学に興味を持っていて独学で勉強していました。

中学・高校・大学時代の部活動

中学時代は家庭科部に所属していましたが、途中で生徒会長に選ばれてしまったために生徒会活動で忙しくなり退部してしまいました。高校時代は放送部に入りました。放送コンテストでは県大会までは残る成績を出していました。



愛猫チビタ